西下ケ橋地区集落調査報告

NPO法人大谷石研究会 会員　遠藤 康一
宇都宮大学地域デザイン科学部建築都市デザイン学科 講師

令和4年11月6日に、宇都宮市下ケ橋町西下ケ橋地区にて、大谷石研究会メンバーと小山高専、宇都宮大学、千葉大学の学生のみなさんで調査を行いました。当日は秋晴れの中、地区の住民の方々のご協力の下、3班、総勢19名のメンバーで大谷石建物の実測とヒヤリングを行い、無事に調査を終えることができました。

宇都宮市北部に位置する西下ケ橋地区は、周囲に稲作地帯を臨む古くからの農業集落です。鬼怒川の支流から引かれた用水路が集落の東西を分ける通りに沿って流れ、その両側には農家の敷地の連なりが南北に約600m続きます。通りに面して断片的に現れる大谷石塀、その背後には大谷石蔵や石造、木造が混在した各種建物群が農家の母家を取り囲むように建ち並び、その奥には所々に屋敷林を抱えた穏やかな風景が連続しています。

調査に先立ち全員での集合写真

大谷石蔵調査の様子

石蔵（積石造）の外観

置き屋根の石蔵(張石)と農村風景

木骨張石造の石蔵（明治20年）と沿道の用水路

調査では、この地区内の敷地28筆、大谷石建物57棟を対象に、建物の用途・年代・規模といった基本情報に加えて、構成する石の種類・仕上げ・装飾等の特徴、建物の利活用の履歴に関してヒヤリングを行うと共に、実測と写真撮影を行っていきました。建物を構成する石には、大谷石が多く用いられていたことに加えて、近隣で産出される徳次郎石や長岡石、出入口のアーチ部材に芦野石が用いられるものなど、複数種の凝灰岩の使用が確認できました。また農業集落らしく、大谷石建物としては石蔵の他、農機具や農作物貯蔵に用いられる納屋が多く見られ、その大半が大きな用途変更なく現在まで引き継がれていました。さらに石蔵は、明治中頃の木骨張石造から大正、昭和期の積石造まで幅広く存在し、なかには張石のパターンの特徴からその過渡期ではないかと推察されるものも見受けられました。木造の板倉も数棟確認されるなど、今後の調査の進展によって、近代以降の蔵の構法の変遷の一端が集落の営みと共に捉えられて行きそうです。

宇都宮には、石・木・水といった土地由来の資源と暮らしの密接な関係が読み取れる豊かな環境が数多く残ります。そこからは、人の営みと場所との結びつきが捉えられると同時に、未来に向けて持続的な住環境をつくっていくための新たな気づきを得ることができます。このような活動を継続することの重要さを再認識する機会となりました。

置き屋根の下部に土を塗り耐火性能を高めた板倉

暮らしと水を繋げる大谷石塀

会員通信

大谷石の再利用方策に関する調査研究が優秀賞を受賞！

NPO法人大谷石研究会 会員　三浦 魁斗
東京大学大学院　工学系研究科　都市工学専攻　博士課程
宇都宮市役所　うつのみや市政研究センター　専門研究員

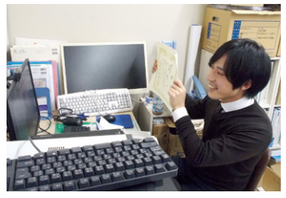
私は大谷石研究会の一員としての顔のほかに、東京大学大学院での博士課程と、宇都宮市役所での専門研究員という2つの顔を主に持ち合わせています。今回は、後者の専門研究員として実施した「大谷石の再利用方策に関する調査研究」が、とある賞をいただいたのでご紹介します。

賞の前に、まず私の研究を紹介させてください。令和2年度に実施した私の研究は、地域資源の持続ある活用の観点から近年光が当てられている建築・土木資材の「再利用」に着目し、宇都宮市の地場産材である「大谷石」を対象に、アンケート調査の分析によって、再利用の実態と意向を解明し、再利用方策を考察することを目的としたものでした。

上述した研究が、日本都市センターによる「第12回都市調査研究グランプリ」の政策基礎部門において、優秀賞をいただきました。参考までに、都市調査研究グランプリ（通称「CR-1グランプリ」）とは、日本都市センターによって平成22年度より実施され、全国の自治体が行った調査研究や自治体職員が自主的に行った調査研究を募集し、特に優秀な作品を表彰するものです。

こうした研究成果が、多くの人々に大谷石文化を知っていただくことへつながれば幸いです。これからも、引き続きがんばって研究を進めてまいります。

※以下のURLにて研究報告書を公開しています（宇都宮市ウェブサイトへのリンク）



https://www.city.utsunomiya.tochigi.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/009/231/r2-8miura.pdf

「会津・喜多方面研修見学会」に参加して

NPO法人大谷石研究会 会員
株式会社 田村忠設計事務所　田村 紀夫

令和4年10月15日、コロナ禍は収束の気配を感じさせるものの、まだ予断を許さない状況の中で細心の注意を払いながら、福島県会津・喜多方地方を巡る研修見学会を実施しました。秋晴れの天気にも恵まれ、参加者22名で一日楽しくも貴重な体験をさせていただきました。午前中に喜多方市周辺を巡り、午後は会津若松市に移動してそれぞれに見ごたえのある場所を訪れましたが、いずれも深く印象に残る素晴らしいものばかりでした。

まず最初の目的地は、「一ノ戸川橋梁（いちのとがわきょうりょう）」です。JR磐越西線喜多方～山都間の一ノ戸川に架かる全長445m、高さ24mの鉄橋で、川上部の最大支間距離が61mの上路式ボルチモアトラス（平行弦）橋です。橋脚は地元で採取された花崗岩が使用されており、鉄骨トラスの繊細さと石の橋脚の力強さが見事に調和し、素晴らしい景観を創り出していました。ちなみに、ボルチモアトラス橋は国内の現存例が少なく、2016年に「土木学会選奨土木遺産」に認定されています。

新宮熊野神社は皆さん感激でした

石積の橋脚と鉄の橋梁が美しい磐越西線一ノ戸川橋梁

次に訪れたのは「新宮熊野神社」です。ここには数多くの国・県・市指定の文化財がありますが、中でも圧巻なのは国の重要文化財に指定されている「長床（ながとこ）」です。この建物の建立年代は不明ながら、解体修復時の調査で形式・技法から平安時代末期から鎌倉時代初期に拝殿として建立されたと推測されています。間口27m・奥行12mの長方形の単純な平面で、直径一尺五寸（45cm）の円柱44本が十尺（303cm）の等間隔で並びます。柱間は吹き抜けで外周にも壁がなく、林立する太い柱は全て見通すことができ、緊張感に満ちた空間と荘厳な雰囲気を今も変わることなく伝え続けております。

喜多方の豪商屋敷「甲斐屋敷」もすばらしかった

喜多方駅前にある荻野石の石蔵

内部が二重らせん構造の「会津さざえ堂」

続いて向かったのは、喜多方駅周辺の「JRよつば石蔵」と「旧甲斐家蔵住宅」です。JAよつば石蔵は大正時代に米倉庫として建てられましたが、残念ながら現在は使われておりません。外壁には大谷石によく似た地元産の荻野石が使われています。かつては美術展やアートプロジェクト等の利用実績もあるとのことなので、今後の活用に期待したいところです。

旧甲斐家蔵住宅は、蔵座敷・店蔵・醤油蔵・主屋が国の登録有形文化財となっています。厳選された貴重な銘木などの建築材料を使った建物や回遊式庭園など当時の繁栄ぶりを今に伝えています。代々の当主が受け継いで来た伝統と文化を次の世代へ継承することの大切さを肌で感じることのできる大邸宅でした。

午後は、会津若松市の飯盛山に建てられた「さざえ堂」に向かいました。建立は寛政8年（1796年）で、国の重要文化財に指定されております。高さ16・5m、六角形の平面を持つ三層構造の独特の建物です。内部には二重らせん構造の板張りの斜路があり、右回りの上り斜路と左回りの下り斜路が別々に存在します。かつては西国三十三観音像を上り下り二つのらせん状斜路に沿って配置し、巡礼観音堂として建立されたとのことです。堂内を廻りながら、よくぞ二重らせんを木造で建てたものだと感心しました。これだけ複雑な架構の二重らせん構造を頭の中できちんと理解し、間違えることなく材料を加工し組立てる事自体、本当に凄い技量だと改めて先人達の偉大さを直に肌身に感じる事ができました。

今回初めて研修見学会に参加させていただきましたが、私自身も知らなかった事や初めて訪れる場所での体験など、このようなツアーでしか経験できない非常に貴重な研修見学会でした。有意義な時間を過ごさせて頂いたことに感謝いたします。

大谷石　東西南北

洋館を思わせる水道施設
盛岡・米内浄水場の出水井

NPO法人 大谷石研究会広報担当
平沼　隆志

浄水場の正門近くに立つ八角形の建物。大谷石の柱など独特な外観は洋館を思わせる。実は浄化した水を場外に送り出す出水井（しゅっすいせい）。水道施設としては必要以上に文化的な外観といえる。本来の役目を終えて久しいが、国の登録有形文化財として生き続けている。

ここは岩手県盛岡市の米内（よない）浄水場。1934（昭和9）年に完成した盛岡最古の水道施設だ。当時としては最先端の機能を備えており、建築物の様式も最先端を目指したようだ。ろ過池調整室三基も大谷石を生かしたモダンな外観だ。